

マテリアリティのKPIとその進捗 ー環境ー

 環境と共に 脱炭素社会の実現	2030年 コミットメント	脱炭素社会をリードし次世代へつなぐ地球環境の創造 私たちは、かけがえのない地球環境を次世代に引き継ぐため、再生可能エネルギーの調達拡大や、省エネルギーの徹底等に全社一丸となって取り組み、脱炭素社会の実現に貢献します。			
	背景と考え方	化石燃料への依存からの脱却を目指す脱炭素化が世界的な潮流となっていることを受け、JFRグループは、再生可能エネルギーの活用等による「脱炭素社会の実現」を重要課題として位置付けています。			
	指標	2021年度実績	2022年度実績	2023年度KPI	2030年度KPI
	●Scope 1・2 温室効果ガス排出量	●36.7%削減(2017年度比) (Scope1・2排出量122,812t-CO ₂)	●43.5%削減(2017年度比) (Scope1・2排出量109,785t-CO ₂) ●ネットゼロ移行計画策定 ●SBTネットゼロ認定取得 ●EV充電スタンドの拡大(エンゼルパーク)	●40%削減(2017年度比)	●60%削減(2017年度比) ◎2050年ネットゼロ
	●事業活動で使用する電力に占める再生可能エネルギー比率	●20.3% 対前年10.0%増 (再エネ電力使用量62,156MWh)	●33.6% 対前年13.3%増 (再エネ電力使用量102,676MWh)	●40%	●60%
	●創エネルギー	—	—	●新電力事業者との協業による再生可能エネルギー自家発電の導入	●新電力事業者との協業による再生可能エネルギー自家発電・自家消費の拡大

 環境と共に サプライチェーン全体のマネジメント	2030年 コミットメント	お取引先様とともに創造するサプライチェーン全体での脱炭素化の実現 私たちは、お取引先様とともに、環境に配慮した製品やサービスの調達等に取り組み、同時に、再生可能エネルギー化、省エネルギー化に取り組み、サプライチェーン全体での脱炭素社会の実現に貢献します。			
	背景と考え方	脱炭素社会の実現に向けて、企業は自社の事業活動だけでなく、サプライチェーン上の活動に伴う温室効果ガス排出量も把握・管理することが求められており、重要視されています。JFRグループは、お取引先様と協働し、Scope3排出量削減を目指しています。			
	指標	2021年度実績	2022年度実績	2023年度KPI	2030年度KPI
	●Scope3温室効果ガス排出量	●17.3%減(2017年度比) (Scope3排出量2,420,492t-CO ₂)	●5.7%減(2017年度比) (Scope3排出量2,761,669 t-CO ₂) ●お取引先様説明会の実施 (4月開催、253社参加、大丸松坂屋百貨店)	●10%削減(2017年度比)	●40%削減を目指す (2017年度比) ◎2050年ネットゼロ



環境と共に

サーキュラー・
エコノミーの
推進2030年
コミットメント

背景と考え方

サーキュラー・エコノミーの推進による未来に向けたサステナブルな地球環境と企業成長の実現

私たちは、お取引先様とお客様との協働により、新たな環境価値を生み出すための革新的なビジネスモデルを創造し、サーキュラー・エコノミーにおける競争優位性を獲得します。

大量生産、大量消費を前提とした従来型のリニア・エコノミーによる環境問題の深刻化が世界的に課題となる中、JFRグループは、2021年、資源や製品の価値を最大化する「サーキュラー・エコノミーの推進」を新たなマテリアリティの一つと位置づけました。

指標	2021年度実績	2022年度実績	2023年度KPI	2030年度KPI
●廃棄物排出量 (食品廃棄物含む)	●30.0%削減(2019年度比)	●26.7%削減(2019年度比) ●AI需要予測による食品ロス削減実証実験 (大丸東京店) ●大阪市環境局の事業系廃棄物マネジメン トの優良表彰受賞(JFR情報センター)	●15%削減(2019年度比)	●50%削減(2019年度比)
●エコフによるリサイクル回収量	●累計1,101t (2021年度 265t)	●累計1,468t (2022年度 367t)	●累計1,500t	●累計3,000t
●リサイクル・リユース	●ギフトカタログの回収・リサイクルを開始	●食廃油から国産SAFの製造を目指す 「Fry to Fly Project」へ参画 (大丸松坂屋百貨店 2023年) ●端材を活用した大阪芸大サステナブル プロジェクト(J.フロント建装) ●コンタクトレンズケースの回収活動(JFR サービス)	●お取引先様とお客様との協働に よる使用済み製品のリサイクルや 再製品化の実現	●お取引先様とお客様との協働に よる使用済み製品のリサイクルや 再製品化の拡大
●シェアリング・サブスクリプション・アップサイクル等事業	●ファッションサブスクリプション事業 「アナザーアドレス」スタート	●「アナザーアドレス」メンズライン投入に よる事業拡大 (大丸松坂屋百貨店 2023年)	●お取引先様との協働による シェアリング・アップサイクル等 事業への新規参入	●お取引先様との協働による シェアリング・アップサイクル等 事業のシェア拡大

脱炭素社会に向けた挑戦



JFRグループは、2050年までにバリューチェーン全体で温室効果ガス排出量のネットゼロ^{※1}実現を目指して、マテリアリティに「脱炭素社会の実現」と「サーキュラー・エコノミーの推進」を掲げ、温室効果ガス排出量削減と資源循環の両輪で取り組んでいきます。

2050年ネットゼロに向けて

昨今、気候変動は極めて深刻なレベルまで進行し、将来世代はもちろんのこと、現世代の私たちを含め人類がその危機にさらされています。当社グループは、気候変動をサステナビリティ経営上の重要課題と位置づけており、気候変動に伴うリスクや機会は、事業戦略に大きな影響を及ぼすとの認識のもと、対策に取り組んでいます。

目標設定

当社は、グループ全体で気候変動対策を推進するためには、中長期の野心的な削減目標設定と達成に向けたロードマップの策定が必要だと考えています。これに基づき、2019年に、Scope1・2・3温室効果ガス排出量削減目標において、SBT (Science Based Targets) イニシアチブ^{※2}による認定を取得しました。2021年には、2030年のScope1・2温室効果ガス排出量削減目標を従来の40%から60%削減(基準年2017年度比)に引き上げ、「1.5℃目標」としてSBT認定を再取得しました。

そして、2023年2月に、Scope1・2・3温室効果ガス排出量について、2050年までの「ネットゼロ目標」の認定を取得しました。

目標年度	SBT認定を取得した目標内容
2050年	● Scope1・2・3温室効果ガス排出量ネットゼロ
2030年	● Scope1・2温室効果ガス排出量60%削減(2017年度比) ● Scope3温室効果ガス排出量40%削減を目指す(2017年度比)

ネットゼロに向けた取り組みの方向性

2050年ネットゼロ実現に向けて、当社グループは、「温室効果ガス排出量削減」と「資源循環」に重点的に取り組めます。

具体的には、省エネの徹底や店舗の再生可能エネルギー(再エネ)切り替え拡大等によるScope1・2温室効果ガス排出量削減、お取引先様やお客様との協働によるScope3温室効果ガス排出量削減に取り組むとともに、

3R^{※3}強化やサーキュラー型ビジネスの拡大等に取り組む、これらを推進することによって、バリューチェーン全体で2050年までのネットゼロを目指します。

- ※1 温室効果ガスの排出量を徹底して削減し、残りの排出量について、森林吸収やCCS(CO₂の回収・貯留)等による除去量を差し引いて実質ゼロにすること
- ※2 企業が最新の気候科学に沿った野心的な排出削減目標の設定を可能にすることを目的として、2014年、CDP、国連グローバル・コンパクト、WRI(世界資源研究所)、WWF(世界自然保護基金)の4団体が共同で設立
- ※3 Reduce(リデュース)、Reuse(リユース)、Recycle(リサイクル)の3つのRの総称



再エネ電力を拡大しサステナブルな店舗へ

小売業の大丸松坂屋百貨店やパルコを主要事業会社に擁する当社グループにおいて、Scope1・2排出量の90%以上が店舗からの排出であり、そのうちおよそ80%が電力使用に伴う排出です。よって、店舗で使用する電力について、省エネ化およびエネルギー効率の向上を図るとともに、再エネへの切り替えが必要であると認識しています。

2019年に100%再エネで運営する店舗としてオープンした大丸心斎橋店を皮切りに、関西・関東地区の店舗を順次再エネに切り替えた結果、2022年度には、

再エネ比率33.6%、Scope1・2排出量は基準年とする2017年度比で43.5%削減となりました。

なお、2023年4月には、松坂屋名古屋店(北館除く)や名古屋PARCO等、中部地区の大型店舗の切り替えを実施し、更なる再エネ比率向上に取り組んでいます。

当社は、再エネ電力で運営する店舗は建物の環境価値を向上させ、環境課題に意識の高いお取引先様やお客様の支持獲得につながると考えており、今後も再エネ電力への切り替えに取り組んでいきます。

再エネ普及への貢献

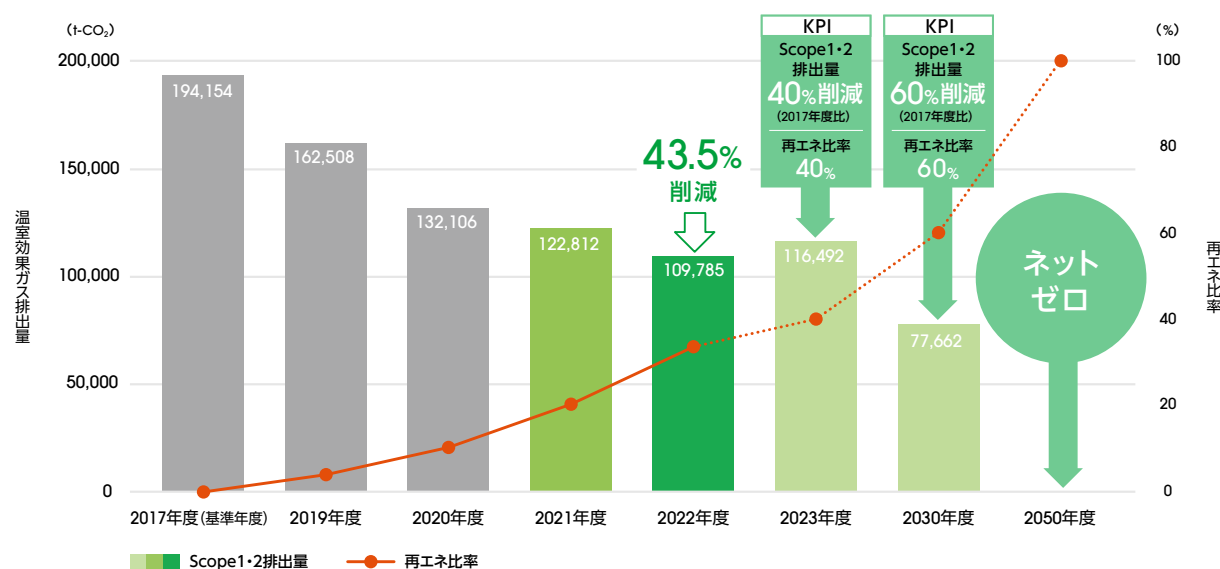
渋谷PARCOや京都ゼロゲートでは、店舗の屋上に太陽光パネルを設置し、自家発電を行っています。今後は、追加性^{*}のある再エネ調達の導入にも取り組み、調達先の多様化に伴うエネルギーレジリエンスの向上をはかります。

^{*}新たな再エネ電源の普及・拡大に寄与し、CO₂削減に効果があること



渋谷PARCO屋上に設置されている太陽光パネル

Scope1・2排出量および再エネ比率の推移



電気自動車(EV)充電スタンドの増設

駐車場を運営する事業会社のエンゼルパークは、お客様が無料で利用できるEVスタンドを設置しています。2022年度はこれを増設し、計10台となりました。なお、2023年4月からは、全館で使用する電力を100%再エネに切り替え、電気自動車を利用されるお客様の利便性向上とともに、社会の脱炭素化にも貢献していきます。



エンゼルパーク駐車場のEV充電スタンド

サーキュラー・エコノミーに向けて舵を切る

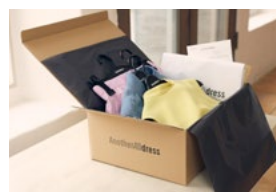


大量生産・大量消費・大量廃棄が前提となる直線型のリニア・エコノミーにより、資源不足、地球温暖化、廃棄物処理の問題などが深刻化する中、サーキュラー・エコノミーの重要性が高まっています。当社グループは、2021年度からマテリアリティに「サーキュラー・エコノミーの推進」を掲げ、環境課題に係るリスク低減と、新たなビジネス機会獲得の両立を目指しています。

環境に配慮したファッションサブスクリプション事業

2021年3月にスタートしたファッションサブスクリプション事業「AnotherADdress（アナザーアドレス）」は、“服は使い捨てではない”という信念のもと、ファッションの本質的な価値や、サステナブルな取り組みを重視し、社会や環境にとって持続性の高いビジネスモデルへ転換することを目指すサービスです。

2023年3月、お客様からの要望が多かったメンズアイテムを新たにラインナップに加えました。男性のお客様はもちろん、ジェンダーレスにファッションを楽しみたいという幅広いニーズに応えることで、ファッションの愉しさを「より自由に」「より多くの方に」提供していきます。また事業拡大に合わせて、再利用可能なガーメントバッグを用いた日本初の循環型配送を導入しました。これにより、お客様への配送時における段ボールの使用を全廃し、ビニールの使用量も30%削減（当社比）を実現します。アナザーアドレスは、今後も環境配慮型のビジネスモデルを追求していきます。



従来の配送方法



再利用可能なガーメントバッグ

お客様とともに取り組む「エコフ」

大丸松坂屋百貨店はサステナブルな商品やライフスタイルを提案する「Think GREEN」活動に取り組んでいます。2016年度からスタートした「エコフ」は、百貨店の店頭において、お客様から不要な衣料品や靴、バッグなどを回収し、新たな素材や製品に再資源化・再利用化する持続可能な取り組みです。

お客様の環境意識の高まりと積極的な参加によって毎年成長を続け、2022年度の回収量は36.7t（2016年度からの累計回収量1,468t）となり、参加者も過去最高を記録しました。2023年春のキャンペーンでは、大丸福岡天神店と福岡PARCOが共同開催するなど、さらに取り組みを拡大しています。

なお、2022年度は、エコフ寄付活動の取り組みとして、環境課題解決に取り組む4団体へ200万円の寄付を行いました。



プラスチックの資源循環

大丸東京店、松坂屋上野店は、2021年12月から、衣料品の納品時に付帯するプラスチック製カバーの回収・リサイクルを行う「POOL PROJECT TOKYO」に参画しています。



これは、レコテック株式会社が、東京都内の参画商業施設から発生したプラスチック製カバーを回収し、高度マテリアルリサイクルを行う取り組みです。再生されたプラスチックは、発生元から輸送・減容・加工などの全ての過程でトレーサビリティがとれたPCR材※「POOL樹脂」として製造業者へ販売されます。

今後、新たな製品化や事業化が検討されており、当社グループも、このような取り組みに参画することで積極的に資源循環を推進していきます。

※消費者が製品を使用した後に回収されるリサイクル材であるポストコンシューマーリサイクル材

食廃油から国産SAF (持続可能な航空燃料) の製造を目指す「Fry to Fly Project」へ参画

Fry to Fly Project



大丸松坂屋百貨店は、持続可能な航空燃料 (SAF:Sustainable Aviation Fuel) の国内初となる大規模生産を目指した食廃油の資源循環の取り組み「Fry to Fly Project」に参画しています。本プロジェクトは、設立趣旨に賛同する参加企業・自治体・団体が相互に連携し、トレーサビリティを明確にしながら、家庭や店舗等から排出される食廃油が資源として回収されるための環境づくりを促進しています。

2023年9月、大丸松坂屋百貨店は、日揮ホールディングス株式会社、株式会社レポインターナショナル、合同会社SAFFAIRE SKY ENERGYの3社と百貨店業界初となる国産SAF製造を目的とした食廃油の供給に協力する基本合意書を締結しました。全店舗の総排出量の15%を占める、大丸心斎橋店、大丸芦屋店でSAFの原料となる食廃油の提供を開始しており、今後、提供店舗拡大に向け取り組んでいます。

また、国産SAFの認知向上、普及の契機となるイベントなどを通して、お客様に脱炭素に貢献する資源循環の重要性を継続的に伝えていきます。

サプライチェーンの構築 JGC



※当社の店舗から排出される食廃油をレポインターナショナルが収集し、SAFFAIRE SKY ENERGYへ引き渡します。SAFFAIRE SKY ENERGYは、2024年度下期～2025年度初頭の生産開始を目指し、大阪府堺市で建設中の日本初となる国産SAFの大規模生産プラントにおいて、レポインターナショナルから引き取った食廃油を原料としてSAFを製造します。日揮HDIは、食廃油を原料とするSAF製造事業に関するサプライチェーンの全体構築を行います。

廃プラスチック削減に向けて

大丸松坂屋百貨店では、2022年4月に施行された「プラスチック資源循環促進法」施行を受け、使い捨てプラスチックの排出量抑制に取り組んでいます。特定プラスチック使用製品*については、①カトラリーの有料化、②お客様へのお声がけ(必要な方にのみ提供)、③カトラリーの素材変更のいずれかを、お取引先様との協働で実施し、お客様のご理解を得ながら使用量の削減を推進しています。

※商品の販売または役務の提供に付随して消費者に無償で提供されるプラスチック使用製品

2022年度 使い捨てプラスチック製品 使用量削減実績

削減目標 (2021年度比)	実績		
	使用量(原単位)*	削減率	達成率
▲20%	0.1623	▲48.7%	+243.7%

※単位設定：協働するお取引先様の店舗における使い捨てプラスチック製品使用量合計(kg)/協働するお取引先様の店舗における売上高(百万円)

博多大丸では、2022年11月、長崎県対馬市と「SDGs推進に関する包括連携協定」を締結しました。地形や海流など様々な要因によってもたらされる対馬市の海洋プラスチックごみ問題へのアプローチとして、漂着した海洋プラスチックごみをオーナメントにアップサイクルしたクリスマスツリーを作成し、店舗前広場に飾りました。ツリーの足元には、対馬市の海岸の現状を伝えるパネル展示を行い、プラスチックごみを削減するためには、一人ひとりの行動変容が必要であることを訴求しました。



海洋プラスチックごみをアップサイクルした
オーナメント



対馬市の海ごみの現状を伝える
パネル展示



装飾にアップサイクル

大丸松坂屋百貨店は、季節ごとに入れ替えが生じるイベント装飾物の廃棄に課題意識を持っています。

2022年のクリスマスシーズンに、松坂屋名古屋店で展示されたネップ・アート クリスマスツリーは、廃棄予定のコットンのリサイクルした紙で作られた青森県五所川原の立佞武多(たちねぶた)を、さらにアップサイクルして制作されました。展示後は、丁寧にはがされた後、青森県産の流通されない規格外のリングで醸造したシードルのラベルに活用されました。



ネップ・アート循環型クリスマスツリー

サステナブルな商業施設

渋谷PARCOは、2022年11月、4階を大規模リニューアルしました。ヴィンテージショップ、インテリア・アートショップが新たに店出し、「リユース/受け継ぐ」「リプロダクト/作り直す」「ハンドクラフト/手仕事の重要性」の3つのテーマで「サステナブル」を表現しています。

今回の改装では、テナントの入れ替え時の内装変更に伴う廃棄物削減、内装の投資をなるべく抑えながら、最低限のコストで出店できる仕組みを取り入れ、よりサステナブルな商業施設を実現しました。これにより、若いスタートアップブランドやクリエイターも出店しやすくなりました。



渋谷PARCO 金三昧「Chim↑Pom from Smappa! Group」による実験的プロジェクトショップ

端材に命をふきこむプロジェクト

ホテルやオフィスの内装などを手がけるJ.フロント建装では、内装建材などの製造過程で、木の切れ端や使えなくなったフィルムなどの端材が発生していました。これを活用すべく、大阪芸術大学とタッグを組んだのが、「端材に命をふきこむプロジェクト」です。

学生が、豊かな想像力と柔軟なデザイン力で、端材という不揃いな面白さと向き合いながら、ユニークな作品を制作し、デザインコンペの入賞作品は、大丸心斎橋店で展示しました。

当社グループのサステナビリティにける思いと学生たちのものづくりに対する思いが、見事に結実するプロジェクトとなりました。



最優秀賞作品

ユーティリティ賞作品